

皆様おはようございます。コロナ禍の中ですが、今朝も神様にある家族である兄弟姉妹の皆様方と一緒に、生ける神様に礼拝を捧げることができますことを感謝いたします。

2月ももう半ばになりました。3月の声を聞けば厳しい寒さからも解放されるという事ですが、あと2週間すれば3月になるということ喜ばしく思います。今年の初め私も妻も新潟の生まれですが、帰省をさせていただきました時、北陸の高速道路を走るときに、横殴りの強烈な海風を体験いたしました。それはもう、1トンを超えるような車が押し倒されるかの勢いの強い風でした。

私たちの人生の中にも時に強い風が吹いて、そして状況が荒れに荒れて收拾がつかなくなると言う、そのような向かい風の苦しい状況と言うものがあるのではないのでしょうか。

先週の個所ではイエス様があの山奥のところで一万人の人に給食して下さったその出来事が記してありました。一万個のパン、二万個のパン。それはどれほどの量のものであるかを考えました。一クラス40人のクラスが250組。小学校6学年であれば、ひと学年が42クラス。これで一万人数です。パンを1個ずつ配っても1万個。少年のお弁当二番が6個入っていたという事ですから、小型のパンでしょうから、満腹になるまで食べたとのことですから、十万個を超えるパンの量と考えれば、気が遠くなりそうです。

イエス様は青臭の草の上で詩篇23編が言う通り、人々を養って下さいました。主は良きは羊飼いです。そして私たちの必要を満たして下さり、命を育み守ってくださいます。

そして今日はガリラヤ湖の上で強風の中、荒れた湖の上で弟子たちの命を助けてくださいました。

人々はパンの奇跡の後イエス様を王に担ぎ上げようとしてしました。しかしイエス様の目的地は宮殿の玉座ではなくて十字架にかかって人の罪を贖うことでした。イエス様は祈るために退かれました。この箇所はマタイとマルコに記述がありますのでそちらをも参考にいたしますと、祈るために山に退かれました。そして弟子たちだけで向こう岸に行かせたと書いてあります。

イエス様はあらゆる誘惑から救い出されるため、祈り過ぎされました。自らを高められ、尊敬を受け、権力を得て、物質にも満たされ、何の心配もない人生を過ごすよりはむしろ、貧しい人、困難の中にいる人、病の人たちと共に生きる道を選ばれました。そして十字架へ赴かれました。イエス様はご自分の進むべき目標に向かってまっすぐ進んでおられました。神様のお守りを信じ、ご自分が遣わされたその御旨の中であって、遣わされた方、父なる神様がご自身を通してその御業を、不思議なしるしを通して果たされることを信じきって進んでおられました。遣わされた方の御心を行うこと、これこそが私の食べ物だ。

これこそが私の生きる道だ、私の喜び、私の養いだ、私の糧だ、そうイエス様は語られました。そして天に御心になるように地にもなされますようにと、ひたすらそのことを願い進まれました。

イエス様は山上で祈りを捧げておられます。遣わして下さった方の御業を現してくださいと祈り続けました。

そして弟子たちは自分たちだけで舟に乗り、ガリラヤ湖を渡り、向こう岸のカファルナウムへ行こうとして舟を漕いでいます。すでに暗くなっていましたが、イエス様はまだ彼らのところには来ておられませんでした。

このガリラヤ湖で舟をこいで移動すること。こういうことは弟子たちの中、元漁師であった人たちにとっては全く慣れていたことでした。

そうこうしているうちに、その晩は強い風が吹いてきました。そして湖が荒れ始めるそのような天候でした。凄まじい風が吹き、次の言葉、「荒れ始めた」とは、ギリシャ語では「目を覚ます」「荒々しく成長する」という意味も持つ言葉が当てられています。荒々しくその度合いを深めようとしていたその不穏な状況がまさに目を覚まそうとしていました。

なんとも不気味なこれからの困難を象徴させるような表現がギリシャ語には記されてています。真っ暗闇のその中で弟子たちは自分たちだけでその状況に対処しようとしていました。

19 二十五ないし三十スタディオンばかり漕ぎ出したころ、イエスが湖の上を歩いて舟に近づいて来られるのを見て、彼らは恐れた。

25 ないし 30 スタジオンばかり漕ぎ出した頃それは約 5 キロメートル位ですから、結構な距離です。5 キロメートルと言えば、25 メートルプールの長さの 200 倍です。もう既に大分漕ぎ出していたということが分かります。おいそれと戻ることのできないまさに湖のど真ん中の最も深いところを指すのではないのでしょうか。

私は小学生の時水泳部でしたけれども、競技で 50 メートルプールを泳ぐときにその真ん中の 25 メートル付近は確か水深が 150 センチメートル位のところだったのでしょうか。私の身長は 130 センチメートルくらいだったでしょうから、私の身長よりも深いそのところで足がつったら自分はどうなってしまうんだろうと思ったものでした。その真ん中を指し示す赤い線が深い深い水の底に横たわっているの見て、ここはまさに足の立たないところだと、恐怖を持って通過したことを思い起こしております。

弟子たちも、そこは戻るに戻れない所でした。5 キロも漕ぎ出したその湖の深い所。そこで強い風が吹いて、湖は荒れ始めました。何か恐ろしい状況が目を

覚まそうとしていました。漕いでも漕いでも先に進まず、漕ぎあぐねているとき。この先どうなってしまおうだろうかと言う、自然の脅威の中にある不安や恐怖があったと思いますけども、彼らはこの後、自然の猛威を感じて命の危険を肌身に感じるという事とは異なった恐怖、見たことも経験もしたことのない恐怖を味わうことになります。それはイエス様が湖水の上を歩いて船に近づいて来られる様を見るということでした。

別の福音書ではこの状況の中、弟子たちは幽霊を見ているものだと思って大声を上げたとあります。その夜の真っ暗闇の中手に持った松明は強い風の中、嵐の中、役に立たず、どちらの方向へ進むべきかも定かでない漆黒の闇の中で孤軍奮闘している弟子たちでした。彼らは生きるか死ぬかの戦いに突如としてさらされたのです。この時も力の限りを尽くして踏ん張って自分の命を守るんだと、弟子たちは緊張して、夜半の眠さをちっとも感ずることなく、大自然の強大な力と戦っていました。

その湖水の上に何も背の高いものが埋まっていると言う事はありません。今であれば船のための航路を示すブイのようなものか、標識のようなものが湖にあたりするかもしれませんが、当時は水面があるばかりでした。しかし、何かわからないけれども物が立っている。そしてそれが真っ暗闇の嵐の中、押し流されもせずまっすぐにこっちに近づいてくるぞ。それは人の姿のようだ。まさかそんなことがあり得るだろうか？いやどんどん近づいてくるぞ。松明を照らしてみなさい。すると人間が近づいてくる。湖の水の上を人間が歩いている！

その幽霊を見るような恐怖の中、揺れる松明の光の中でそれはイエス様の姿でした。「うわー幽霊だ」と思ったとしても彼らに間違いはないと思います。私たちであったとしても本当に腰が抜けるようなびっくりするようなことだと思います。

20 イエスは言われた。「わたしだ。恐れることはない。」

21 そこで、彼らはイエスを舟に迎え入れようとした。すると間もなく、舟は目指す地に着いた。

20 節イエス様は言われました。「わたしだ。恐れることはない。」そこで彼らはイエス様を舟に迎えます。どうぞどうぞこちらへ乗ってください。イエス様こんな湖のど真ん中、嵐の中を、よく歩いてここまで来られましたね。ほんとにあなたは幽霊じゃなくてイエス様なんですかと、舟にお乗り頂くときに、イエス様の腕に触ったり、衣を触ったり背中を触ったりしながら、確かにこの形はイエス様だと確信した彼らでした。

弟子達彼らは嵐の中、木の葉が揺れるように舟を揺らしていたその湖の上を、イエス様が歩いて進んでこられるのを見ました。明鏡止水ピタリとも動かない水の上だって人間は歩くことができないのに、その大嵐の中を水の上を歩いて進んでくるとはいったいこの方はどういう方なんだろうと思いました。その驚きと恐怖は、嵐の恐怖とは比較できないほどに大きいものであったに違いありません。そしてイエス様を船に迎え入れると、まもなくすぐに船は目指す地に着いたと書かれています。それからの航海は順風満帆でした。

主は嵐に苦勞しあえぐ弟子たちを救う為、最短距離で助けに来て下さいました。

イエス様は野を分け山を分け、谷を越え、水の上をも歩いて私たちを助けてくださるお方です。

祈りの中、神様からの養いと導きをいただいて、今がその時だと悟るや、イエス様は弟子たちを助けるために湖の真ん中を、強い風が吹いていても、嵐が目を覚ましてこれから大きな口を開けて彼らを飲み込もうとするその荒れ狂った脅威の中、最短距離の道をまっすぐに弟子たちの所へ歩みを進めて下さいました。そしてイエス様が彼らの船の中に迎え入れられると、舟は目指す地に間もなく着きました。

人生の海の嵐の中、孤軍奮闘で苦しみ戦う中、イエス様は私たちの人生と言う名の舟の方へ、まっすぐに、その暗闇の中、嵐の勢いを打ち破って進み寄って下さいます。そしてイエス様を私たちの舟の中にお迎えする時、私たちの心の中心にこの方をお迎えするときに、まもなくすぐに船は目標の所へ着くという真理を教えられます。

がむしゃらに自分の力の限り進もうと思うとき。風や波にあらがうことができず戻ることもできず深い深い、足も立たない自分の能力の限界をはるか超えたその深い水のど真ん中で私たちが消耗して力を失いつつあるとき。とても悪い状況が目を覚まして強い嵐と共に襲いかかって来る時。どうすることもできない、行くにも帰るにもできない彷徨、漂流しているところにイエス様はまっすぐに水の上を歩いて私たちのところに来てくださり、「わたしだ、恐れる事は無い」と語られ、舟の中に入って下さるなら、あの苦勞はどこへやら、たちどころに目的後に導いてくださるこの出来事に目を見張ります。

私たちは人生の目的は何なのか、目標が何であるのかを時に見失い、彷徨い、放浪する時があるかもしれません。何をなすべきか、何を優先すべきか分からない。真っ暗で方向も分からない。しかしそこに主をお迎えすれば嵐は凧となり、私たちを目的の場所へと導いてくださるのです。

パンを祝福して給食し、食べ物与え、そして人生を命を奪う自然の猛威から恐怖から苦しみから救い出し、祈り深く、主に遣わされた救い主イエス様はまっ

すぐに私たちの所に歩み寄り、人生を共にし導き、人生の目的を教え、知恵で満ち、危険から災いから救い出して目的の地に連れて行って下さる。その方が私たちと共におられるということに感謝したいと思います。

22 その翌日、湖の向こう岸に残っていた群衆は、そこには小舟が一そうしかなかったこと、また、イエスは弟子たちと一緒に舟に乗り込まれず、弟子たちだけが出かけたことに気づいた。

23 ところが、ほかの小舟が数そうティベリアスから、主が感謝の祈りを唱えられた後に人々がパンを食べた場所へ近づいて来た。

24 群衆は、イエスも弟子たちもそこにいないと知ると、自分たちもそれらの小舟に乗り、イエスを捜し求めてカファルナウムに来た。

25 そして、湖の向こう岸でイエスを見つけると、「ラビ、いつ、ここにおいでになったのですか」と言った。

26 イエスは答えて言われた。「はっきりしておく。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ。

6:27 朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。父である神が、人の子を認証されたからである。」

「しるし」が何であるかと言ったらそれは「奇跡的なしるし」ですね。そしてそのしるしの目的は、「イエス様が神の許から来られた」という事を明らかにするためのしるしといういみです。

そのことを証するための奇跡であり、しるしを知ろうとするのではなく、「朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。」とイエス様はおっしゃいました。

食べる物、それは食べなければ私たちは生きていくことが出来ません。ですから貧しい人々がパンに執着することも理解できます。

しかしイエス様は、「朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。」と語られました。

私たちが「朽ちる食べ物」を得なければならぬ、それが必要であることを知っておられる神様は、『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』(マタイ 4:4)ともおっしゃいました。

糧があっても、食べても食べてもいつまでもまたおなかがすく。食べ続けてもなお人はいのちを永遠に保ち続けることが出来ない。養っても養ってもいつか

は死ぬべき朽ちるべき人が何によって生きるのか。「いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。」イエス様は、贖いとしてお与えくださるご自分自身のことをここで語られました。

マタイ 6:25 「だから、言うておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。

6:26 空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。

6:27 あなたがたのうちだれが、思ひ悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。

6:28 なぜ、衣服のことで思ひ悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。

6:29 しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。

6:30 今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか、信仰の薄い者たちよ。

6:31 だから、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と云つて、思ひ悩むな。

6:32 それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。

6:33 何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。

6:34 だから、明日のことまで思ひ悩むな。明日のことは明日自らが思ひ悩む。その日の苦勞は、その日だけで十分である。」

パンを得て満腹した。嵐が凧とされるすごい出来事を見てびっくりした。すごいしるしだ、すごい恵みだ。しかしこのしるしと言うのは、奇跡的なしるしと言うのは、イエスがキリスト・救い主であるという事を証しするため、父なる神から遣わされた救い主であるということを証しするための補助教材にすぎなかったのです。救いと恵みの本体に目を向け、「まことの食べ物まことの飲み物」(ヨハネ 6:55 「わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物」となって下さった方をじっと見つめることが大切です。

ご自身の体を命のパンとしてささげ、新しい契約のために人の命のために流されるそのイエス様の血潮、その贖いの出来事こそがいつまでもなくならないで永遠の命に至る食べ物です。

「朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。」

これは、その贖いのいけにえとなってくださったイエスキリストのために働きなさいという事であり、神の国とその義のために、神の御旨のために進みなさいということです。

「父である神が、人の子を認証されたからである。」

マタイ 9:7 「すると、雲が現れて彼らを覆い、雲の中から声がした。『これはわたしの愛する子。これに聞け。』」

父なる神様が御子をこよなく愛して遣わされたイエス様に目を留め、自身の人生の中にお迎えする人は、幸いです。「朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。」このように、糧となり贖いとなって下さったイエス様に感謝し、主を頂き、主と共に生きる人は幸いです。

私たちが人生のどのような最中にあってもその現象の苦しみを見るのではなく、目に見える恵みのみを追い求めるでなく、本当の恵みを与えるため、救いを与えるため遣わされたイエス様を一身に見て離れないものとなって生きることは幸いです。そしてその方のために働くものでありたいと、そのように願うのです。